ホトトギス

七月号

ホトトギス
昭和二年四月三月二十八日運輸省令特別認可雑誌第六二七号
平成三年十二月二日第三種郵便物認可
平成三年七月一日発行（第百十四巻第七号）

俳句随想〔三百四十九〕

汀　子

東日本大震災はまだまだ収束出来ない大変な災害である。その中にあって、大変な日々を耐えながら復興に向って努力しておられる方々に我々は何程のこともお扶けすることが出来ないことに忸怩たる思いである。少しでも何か形になったお手伝いができるように、伝統俳句協会では募金をお願いすることにした。ご協力頂けると大変有難いのは十六年前の阪神淡路大震災の時の事を思い出しているのである。今、まだ余震が続いている。原発の見通しも立たないまま福島の方々も大変である。しばらくゆっくり眠りたいという方があれば、わが家の空いているゲストルームや日本間を提供するから是非お申し出て頂きたい。俳句のお仲間という固い絆で結ばれていることを忘れないで頂きたい。

自然を見つめ自然に抱かれ精一杯生きて行くために我々は俳句を作っていることをもう一度考えて見よう。百花繚乱の春、瓦礫の中に咲いた梅や桜がテレビで映った。涙がでそうである。我々は無力であるが、自然は何かを我々に告げようとしている。一人一人が自分なりに自然からのメッセージを受け止めて俳句にして行かなければならない。関東大震災でご家族を亡くされた京極杞陽さんのことが頻りに思い出される。「わが知れる阿鼻叫喚や震災忌」昭和三十三年十二月号ホ巻頭。

PDF= 俳誌の salon

句日記

汀子

平成二十二年七月三日　芦屋ホトトギス会

雷の予報に向かふ離陸かな
庭椅子に日除一枚とともへり
道をしへ一歩一歩に迷ひあり
もう紛れなき半夏生なりしかな

七月四日　下萌句会

毛虫這ふ視線の中に加はりぬ
すぐそこと言ひし油断の夕立かな
月見草三瓶の旅も旬日に
昨日降り今日梅雨晴となる家居
誰がための闇彩りて月見草

七月五日　ロイヤル俳壇

玫瑰の刺に阻まれ庭手入
籐椅子に山荘の夜の団居あり
大勢の声の集るはたたがみ
雷過ぐる瞬時長しと短しと
軽々と運ぶ籐椅子五六人

七月八日　清交社

夜光虫波間かがよひはじめけり
一日の身を恪勤に梅雨の晴
我も又長寿とよばれ百日紅
こぼす花結界越ゆる百日紅
片陰の消え人通り失せし道
出航のどら轟きぬ夜光虫

七月九日　工業倶楽部

一枚の闇のほころぶ月見草
夕立の真つ只中に着陸す
一滴に始まる夕立なりしかな

七月十日　北海道ホトトギス同人会俳句大会前日句会

やはらかきこの虎杖も蝦夷のもの
万緑の貫く蝦夷の大地かな
じり込めし小樽に父の心訪ふ
海の色消して小樽のじり深し
誰彼に逢ふも旅路よ汗涼し
邂逅は別れなりけり露涼し
汗消えて北海道に着陸す

七月十一日　北海道ホトトギス俳句大会

今日はもう別るる小樽明易し
北国の白夜の旅寝浅かりし

七月十三日　大阪倶楽部

旅終へて汗の家路となりにけり
目覚よき汗の一日のはじまれる
見た目ほど風の通はぬ羅に
汗ぬぐふとも涙拭く仕草とも

七月十三日　綿業倶楽部

夕立の上りたるより旅支度
夕立のありしと迎へられしこと

七月十七日　石見ホトトギス俳句大会前日句会

さういへば祇園祭でありしこと
昼の月細し涼しき在りどころ
運転の涼し三百五十粁

七月十八日　石見ホトトギス俳句大会

満天の星消えし朝露涼し
蚊も刺さぬ夜更の星に包まるる

七月二十日　有恒倶楽部

満天の星と語りて露涼し
月見草咲けば所在の新しく
ハンモック吊せばそこが風の道
夏霧の消えゆく早さ運転す

七月二十日　無名会

サングラス欠かせぬ三百五十キロ
ふたたびは訪ふこともなき深山滝
滝しぶき浴びてこれより帰路となる
星見上げ北斗七星露涼し
わが顔の一部となりぬサングラス

七月二十一日　夏潮句会

満天の星を語らん汗涼し
蟬鳴いて季節移りしこと確か
ナイターの済まねば仕事手につかず
星月夜余韻の消えぬ旅路かな
暑さすぐ忘れて庭に出て行きぬ

七月二十二日　きさらぎ会

水無月の旅の予定のなほ二三
梅雨明けしこと喜んでゐるうちに
梅雨明の太陽占めし都心かな
忘れゐし暑さとなつてゐしことを
水無月の星と語りし旅終へて
梅雨明を誘ふ山風強きこと

七月二十三日　時雨会

梅雨のこと忘れる早さありにけり
花莫莚の染みの記憶もなつかしく
星あまた仰ぎ来し旅汗涼し

七月二十四日　新野分会夏行

山湖には都会の暑さなかりけり
夕菅の花をつづりし宿りかな
つひに来し山湖の宿のはたたがみ

七月二十五日野分会夏行第二句会

雷雨去りけろりと朝の来し山湖
冷房をとめて山湖の宿りかな
夕立の見えてゐる玻璃音へだて
靄立ちて今日の山湖の暑さはや
玻璃越に見てゐる限り暑さなく
よべ暴れたりしいかづちなき目覚
夕立の音まで見えてをりにけり
稿債の待つ家路とは暑かりし

七月二十八日　甲南俳句会

湖に翳落しはじめし夕立雲
盛夏とて家居心のあるがまま
なつかしき汗の消息聞き乍ら
学舎に歴史を刻み来し盛夏
ふりかへる歳月ありて夏休

七月三十一日　東海ホトトギス俳句大会前日句会

夏霧に消されし辺り伊吹山
一雨にしのぐ暑さのあることを
汗拭いてたちまち心立て直す
炎天の犬山城の見えしより
日盛を忘れて車降り立ちぬ

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年七月一日　蕉心会

水無月や昨日と違ふ草の色
箱庭の万物動き初む気配
地下を出てよりハンカチの離されず
下町の足音晩夏近づけて
梅雨傘を買うた途端に晴れてきた
箱庭を天地として動くもの
その中にコロナビールを置く茶店
彦様に頂いたこの扇子どや
山梔子を供花に汝の席出来上る

七月二日　カトリック新聞選者吟

慈雨といふ言の葉重し半夏生

七月三、四日　あうたう句会

歳時記を睨むあなたの目の涼し
甲斐の日に仕上げられたるさくらんぼ
甘さとは届かぬ高ささくらんぼ
万緑の底に吸ひ込まれし事故車
五月雨に明かされてゆく湖の色

七月七日　「WEP俳句通信」出句

梅雨雲に城は小さく佇めり
平城といふ涼しさに磴上る
夏霞霽れゆく先の湖の藍
五月晴信玄の世を語るかに
夏菊の溢れて曽良の墓小さし
紫陽花の白に落着く寺苑かな
道迷ふことも涼しき湖畔かな
梅雨雲に甲斐の山々落着かず
水無月の濠の騒きでありにけり
石垣の苔に難渋天道虫
万緑の桂は城の要とも
籐椅子の湖に向けられたるロビー
七田抜け湖といふ静けさに
変化寺の哀史の色は秘めて
俳聖を偲ぶ本堂灯涼し
梅雨蝶に天守は重くのしかかり
忌心を解く紫陽花の寺苑かな
石垣に蛇遊ばせて城の黙
橋涼し湖見える辺りより

七月八日　土筆会

日焼止めクリームそつと旅の荷に
もう惑はされない君の香水に
震へつつ毛虫高きを目指しけり
香水を替へ禁断の恋終る
軽鳧の子に池広からず狭からず

七月十、十一日　北海道ホトトギス同人会、大会

夏霧やシャコタンブルー見し日はも
飛機降りるよりビール欲る六腑かな
虚子も来し街は涼しく開けたる
東京は嘘と言ひたき涼しさに
人寄せて蚊を寄せて句碑鎮もれり
冷房にまるごと居るやうな小樽
除幕の日語る涼しき涙かな

七月十二日　朝日カルチャー若草句会

滝壺へ落ちれば水となる分子
胡瓜食む音に震撼する漢
物の怪を集めて滝となりにけり
僕胡瓜実は曲つてゐたいのよ

七月十三、十四日　新廣会スクーリング

その中の蔓下闇の一部分
冷房に帰りたがつてゐる歩幅
梅雨雲に川音弾き返されし
親燕人を恐れぬ飛翔かなし
辛党も氷菓貧る空模様
端居めく世界遺産の軒下に
巴里祭や鵜飼の余韻持ち寄りて
鵜舟待つ心君待つ心はも
一点が鵜篝となるまでの黙
通し鴨自分鵜と思てんのちやふ
疲鵜に水の怒つてをりにけり

七月十五日　登高会

大夕立愚陀仏庵を持ち去りぬ
大夕立スカイツリーを歪ませて
ビル街といふ夕立を呼ぶ高さ

七月十六日　浜田吟行会

老鶯の谺弾いて城の黙
蚊に好かれゐる人嫌はれゐる人
蟬鳴いて鬨の声めく城址かな
老鶯や城の昔を語るかに
旅続く果ての山陰道涼し

七月十七、十八日　石見ホトトギス俳句大会

合歓の花ロードと名付けたき三瓶
星の夜を誘へる如雪加鳴く
黒が先づ句碑に近づく日傘かな
旋律は変ロ長調閑古鳥

七月二十日　草木瓜会

浴衣着て温泉街の灯に消ゆる
西に北に炎天続く旅続く
浴衣着て夜を近づけてをりにけり
炎天やこの高気圧何処か行け
古浴衣父の遺せし染みのまま

七月二十三～二十五日　野分会夏行

夕菅や夕暮れ誘ふ色として
榛名富士涼しく夕日をさめけり
かなかなに榛名稜線緩び行く
老鶯に明け渡したる湖の黙
迫り来るまでの静寂雲の峰
星の空洗ひ上げたる大夕立
初参加迎へ四十人涼し
蚋の傷土産としたる下山かな
夕菅の閉ぢて湖畔の動き初む
水面をひつくり返しボート行く
披講子は涼しき佳人ばかりかな

七月二十七日　若水句会

浜風にナイターの灯の点り初む
ナイターの灯に縦縞の燃えてをり
夏痩をしても佳人は佳人なる
ナイターや六甲おろし聞くまでは

七月二十八日　目黒学園句会

首位に立つ阪神ナイトゲームかな
海の日や鳴呼長門陸奥伊勢日向
ナイターや黒と黄色が宙を舞ふ

七月三十日　カトリック新聞選者吟

絵硝子のマリア輝く大西日

七月三十一日　悼　桑田永子様

天上の句座に涼しき夫婦かな

七月三十一日　東海ホトトギス大会前日句会

殿様を偲ぶ涼しき旅として
泳ぎたくなる川幅でありにけり
落し文正俊さんの便りとも

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

淡雪の一しきり舞ひふとゆるみ　東京　今井千鶴子
春と手をつないで歩く女の子　同
会ふたびにきれいになりて卒業す　同
双六の花の都へあと少し　相模原　木村享史
その内といふ約束も春隣　同
追伸に逢ひたしとあり春近し　同
西行忌吉野を思ふ日なりけり　橿原　稲岡　長
千年を耕して来て津波また　同
春の土見るさへむごき津波来し　同
春近きこと土に問ひ空へ問ひ　龍ヶ崎　今橋眞理子
まんさくの枝先ふいに花となる　同
リビングのどこかざらりと春一番　同
振袖は母のお下り上巳の日　神戸　千原叡子
日一日知恵のつく児と雛の宵　同
雛箱を納む蔵の扉開け放ち　同
何するでなく大年に寝転がり　静岡　須藤常央
酔ひ潰れたるは去年とも今年とも　同
初夢の句座に高浜虚子と居り　同

寒鯉のごとくにものを考へる　熊本　岩岡中正
春はまだ海底にある寒さかな　同
鳶鳴いて春まだ頼りなかりけり　同
江戸前の水を脱ぎ捨て帰る鴨　東京　橋本くに彦
帰ろかと決めかねてゐる鴨一羽　同
東京の雪にとまどふハイヒール　同
鴨引きぬ大阪城の陣を解き　奈良　古賀しぐれ
一城の天より地より囀れり　同
大阪を半分落し大霞　同
霜柱てふ力学の立ち上る　福山　竹下陶子
霜柱崩れ大地に声起る　同
風花の平家の秘話を飛ばしをり　同
元日を白波立てて吉野川　徳島　上﨑暮潮
徳島市従へ眉山寒に入る　同
冬晴や門を貫く石畳　同
浅春やうすくれなゐの葉書買ふ　神戸　山田佳乃
還暦のヅカジェンヌ来て鬼やらひ　同
広縁に偲ぶ悌春帽子　同
まづ広く野に置く布石いぬふぐり　香川　湯川　雅
一茎の蒲公英に一帯日向　同
出揃ひて決まる間隔名草の芽　同
旧正や江戸よりつづく時の鐘　東京　大久保白村
旧正のしきたり守り里に老い　同
旧正や大江戸線に待合せ　同

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（六月号より）

純　也・暮　潮・佳　乃
しげ人・昭　代・比奈夫
雅　　・くに彦・一　歩
仁　義・廣太郎

寒菊を活け震災の忌を修す　芦屋　小田ひろ

一月十七日、阪神淡路大震災の犠牲者を弔んで、寒菊を供えたのである。作者はお身内を亡くされたとか仄聞している。寒菊に託された、尽きることのない深い悲しみが伝わってくる。（純也）

作者は、平成七年一月十七日に起こった阪神淡路大震災で御身内を亡くされた。毎年この日が来ると、悲しみも新たに思い出されるのである。季題のしみじみとした美しさが悲しみを誘う。そして平成二十三年三月十一日にも東日本大震災が起こってしまったのである。偶然とはいえ余りにも悲しい。（廣太郎）

住み馴れし京あがりてふ絵双六　京都　安原　葉

絵双六すなわち道中双六。子供のときよく遊んだが、今は見ることもない。しかし、記憶は鮮明に残っている。句意極めて明瞭で簡潔に表現されているところがいい。のみならず、「住み馴れて」で、作者の在は新潟県長岡市でありながら、浄土真宗門の要職として京都に住むことが多い日常と、その京都に対する愛着を言っていると同時によく考えてみると、故郷長岡への郷愁もひそんでいるように思われるのは作者を知っているせいのみではあるまい。そのあたりまことに巧みと言わざるを得ない。（暮潮）

作者の御実家は別の場所であるが、長年京都に住んでおられるのである。多忙を極めるお仕事に就いておられるが、それだけ長く住んでおられると、正に「住めば都」だろう。そんな時、双六に興じられたか、御覧になったか。季題から、何ともいえない臨場感が伝わってくる。（廣太郎）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

沢子選

送られし御水の今は京辺り　京都　安原　葉
人知れず咲くかたかごの群るる谷　東京　同　稲畑廣太郎
ビル街に居て初景色とは孤独　同
あをさ汁人は海から生れしてふ　神戸　三村純也
耕のはかどつてゐるとも見えず　同
通り雨気にもかけずに耕せる　熊本　岩岡中正
励ましのごとく雪嶺ありにけり　同
水音に囲まれてゐて春隣　東京　今井千鶴子
一系の天子の句あり鳴雪忌　同
落ちてよりひととき白き椿かな　千葉　大木さつき
渡り石歩せば鳴き寄る鴨なりし　同
石仏に夜べの雪解け賽光る　福山　竹下陶子
鞆の津の日東一の良夜かな　同
高原のむらさき匂ふ実紫　神戸　長山あや
遠き子のひひなの命あづかれる　同
水温むわが身とろりと重きかな　たつの　浅井青陽子
さりげなくマフラー巻いて待ちくれし　同
うつかりと踏みし寺苑の蕗のたう

山雨晴れ花は明るさとり戻す　橿原　稲岡　長
見上げれば花の天蓋透けて空　同
野の果は天の入口揚雲雀　奈良　古賀しぐれ
野の広さ天の広さが雲雀消す　同
古木とは思へぬ深紅寒牡丹　吹田　宮﨑　正
ものぐさとなつてゐるなり春の風邪　同
梅一輪春秋庭にはじまりぬ　箕面　井上浩一郎
早春の野を跳べる子よ走る子よ　同
眠り草ねむらせ過ぎてつまらなき　神戸　小田三千代
足腰の覚めてはをらず昼寝覚　同
被災地へ雛と共に祈ること　宝塚　水田むつみ
草萌ゆる大地夢みて復興へ　同
もう母の十七回忌日脚伸ぶ　徳島　上﨑暮潮
高階のどの部屋からも日脚伸ぶ　同
人は入れぬ花かたかごの渓ひとつ　東京　河野美奇
かたかごの風紫や地を這へり　同
海蹴つて出でし初日を胸の前　相模原　木村享史
予定表消して加へて春近し　同

PDF= 俳誌の salon

天地有情句評

汀子

送られし御水の今は京辺り　京都　安原　葉

いよいよ始まる御水取の行事。

ビル街に居て初景色とは孤独　東京　稲畑廣太郎

大都会の新年。

耕のはかどつてゐるとも見えず　神戸　三村純也

絵画的見方。

励ましのごとく雪嶺ありにけり　熊本　岩岡中正

厳しさの受け取り方。

落ちてよりひととき白き椿かな　東京　今井千鶴子

汚れやすい白椿の瞬時。

渡り石歩せば鳴き寄る鴨なりし　千葉　大木さつき

一歩ずつ近寄る情。

高原のむらさき匂ふ実紫　福山　竹下陶子

澄んだ高原の空気に澄んだ紫。

遠き子のひひなの命あづかれる　神戸　長山あや

雛を通して情を通わす母と娘。（以下略）

PDF= 俳誌の salon